

あるから、証空上人の私創ではない。しかし、これまでに意義を拡大されたのは、証空上人であるから、「正行」という名目は、証空上人の創といえる。

## 法然上人の人間観について

——特に罪惡觀を中心として——

井 関 隆 清

この罪惡思想は多くの問題が残されている。卒論としては、法然独自の罪惡觀の中心がどこにおかれたかについて論じた。今は未完のまゝではあるが、提出した卒論の序論とも云うべき箇所をそのまま記しておく。

業思想がインド、中国、日本と次第して渡り來つた變遷は大体身口意の三業として考えられ、又行じられて來たのであるが、特に淨土教に於ける業思想は、この身口意三業中、特に意業を中心として、それが阿弥陀仏に対する絶対帰依の心情から業を、キリスト教の原罪意識と

相通じた所の觀を持つようになつた。勿論淨土教における罪の意識は、己れ自身を惡と見なす所に、その起源が見出されるとしても、それは淨土三部經、特に無量壽經に於ける第十八願文に依る救済、あるいは三輩、五惡段と称される淨土教の倫理觀、又御無量壽經に於ける韋提希夫人の凡夫觀、上中下の九品往生に説かれる淨土教的人間觀、等これらを基として淨土教の罪惡觀は展開してゐるのである。これらの思想を中心に行じ、あるいは魂の遍歷の後に、弥陀の慈悲を感じた人々は数多くあるとしても、特にその罪の意識を明確にした人々は中國に於ては覺、道綽、善導と言つた淨土教の祖師方であり日本にあつては源信、法然あるいは親鸞と言つた人々である。今淨土教と言う大きな器の中で、その歴史的に宗教的要素の濃い礎石を造つた法然に於ける罪惡意識は如何なるものであつたか。

現代に於ける罪惡觀の見方は親鸞の罪惡思想に基づくものが多く、彼一人が、その意識の第一人者であるが如くに理解されているような感がある。親鸞と言へば罪惡意識を代表すると言つたような、實に彼にあつては、そ

れが表面化されているのである。このことは韋罪抄の中の「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」と言う言葉を中心に、その惡を論じているものであるが、しかし、ここに問題になることは、この言葉が、はたして親<sup>マタ</sup>自身独自の思想であつたかどうかと言うことである。ここに師の法然としては如何なる罪惡思想を有していたか、それは當時の時代的背景に依るものであつて、必ずしも、その罪惡意識が宗教的意識と倫理的意識との明確な立場に立つていなかった。むしろ法然自身はその思想を説く為には、倫理的な立場に立ちて解明したむきがあるように考えられるが、自己の内的意識は阿弥陀仏に対する往生の爲の絶對的帰依を聖道門の放棄と共に用合せていたことはいうまでもない。そのことは法然の人間的宗教觀を見て行く為には重要欠くべからざることである。

しかし今この罪惡意識と云うことを、當時の社会的背景を通して見るとするならば戦亂に於ける混亂と人民の悲愴なる生活苦よりなす社会の構成にあつては、罪惡意識はその中心を宗教的な立場ではなく、社会倫理の立場を以つて罪惡と考えたものであつて、それを自己の受入

れる側の人々は社会的な身分制約に基づいた人々が大半であつた。故に淨土教が現在の救済を説くものではなくむしろ來世的悲願を以つて當時の人々を救済したのは当然と言わなければならない。故に法然や親<sup>マタ</sup>の罪惡意識は當時の人々からは孤立した思想であつたと考えられる。このことは當時の特定な宗教者に依る内省的自覺から、その惡の問題が起つたとしても、一般大衆の思想的なあり方は、惡そのものが現実の社会生活から出て來た所のものとして、それを如何にすれば、その所より逃れ得ることが出来るかと云う一つの基点に立つてゐることである。したがつて、法然や親<sup>マタ</sup>の如き罪惡を中心とした微低的な思想にはなり得ず、故に法然や親<sup>マタ</sup>にあつても、その罪惡性はむしろ倫理的な面を強調する、きらいがあるのであり、又特に法然と親<sup>マタ</sup>との罪惡意識の比重が異なるとするも時代的背景がその両者の心の底にあつたことは否定されるべくもないのである。今その論はまぢまちであるとするも淨土教が凡夫性の宗教であるといつの定義を打立てたのはとりもなをさず法然の思考性が大きな意義を有することは云うまでもない。